

校補

唯識大意

一名

法相三卷鈔

末

618



校補唯識大意一名相法二卷鈔 下卷

相宗沙門 良遍  
藹々居士 青巖



○阿頼耶識

阿頼耶識

種子をも阿頼耶識の中ふ持てり但阿頼耶識

の種子を受け持つ法ふて種子を薫する事はなし阿頼耶

識の種子をは意識と末那識か薫する事ふて候也其様は

新薫種子

事長く候へは略し候也抑も今申候種子は新薫種子なり

始て薫し出そか故に新薫種子と申候也此外本有の種子

本有種子

あり本有種子と申すは始て薫し出せるは非を第八阿頼

耶の中ふ無始法爾として其氣分あり此ふ二類あり一に

二種法爾

のは有漏の法爾種子なり二ふのは無漏の法爾種子なり彼ふ

も此にも色心万差の種子こまくと皆有り今此本有新

薫有漏無漏の諸の種子も皆有為の法なれば剎那生滅と

唯識論

一



(河流喻)

滅するときはの各々後の種を引起と謂ゆる色の種子の滅する時に色の種子を引く心の種子の滅する時心の種子を引く色の中にも多くの色あり心の中にも多くの心あり皆是の如く其我類を引くなり此故に諸法の種子たることなし譬へは早き河の流れて速み過れども流れ續きて絶えざるが如しされは種子は現行を生し現行は種子を生も種子は又種子をも生も此三の縁の因の昧則ち轉して果現と成る其縁尤も親し先も申候つる四縁の中の因縁の此三の因縁なり新熟本有の種子の相略して是の如し○其法爾無漏の種子の中今此八識所持の無漏の種子具不足に付て五種の種子なり佛の種子あり煩悩所知の二障を斷盡して二轉の果徳に至る無漏の種子を具足するを菩薩乗性の人と名く縁覺の種子あり煩悩障のみを斷盡して自乗性の果に至るに一分をば聲聞乗性の聲聞の種子あり是を三乗の種性と名く此三乗の種性を具

●五性各別

菩薩種性

定性緣覺

定性聲聞

不定性

無性有情

○無餘涅槃

ること人に隨てさまざまに不同なりこれこれの修行をなせば或衆生は佛の種子のみあり此衆生の聲聞も成らず縁覺にも成らず直も佛と成る之を頓悟の大乘と名く或衆生は縁覺の種子のみあり直も縁覺も成て無餘涅槃も入る或衆生は聲聞の種子のみあり此は聲聞に成て無餘涅槃も入る此二人の定性二乗と名く或衆生は三乗の種子三ながらあり此の先づ聲聞も縁覺も成りて後も佛に成る三乗の無漏の種性を並へ具足する頃は初は聲聞縁覺の修行をなし後に菩薩乘に廻轉して佛果に至る之を不定性の類と名く之を漸悟の菩薩と名く或衆生は三乗の種子皆なし此人はいつとなく凡夫にてはつる也三乗の無漏の種子すへて無き人佛すること能はぬ類とす此無性有情の類も一佛乘の理に依るときは理佛性を具すれども無漏の種子たる行佛性を具足せざる故に二轉の果徳に至らざる也之を無性有情と名く之を法相宗の五性各別の法門と云ふ此五種耶織の○無餘涅槃と申すは身も心も皆滅ひ失せて全く



いつくおも生せず永く去りはつる也是れ則ち有爲の諸法は皆盡き失せて無爲常住の法性の眞理のみお成る也之をいみしき事おして聲聞緣覺はかく成らんと願ふ也寂滅爲樂なれば誠お是もいみしき果也身心も永く失せぬと聞けば心細き様に覺ゆるは凡夫の心の拙くして身を愛し生を食はる煩惱に惑はされて涅槃寂靜無爲常住の樂を恐るゝ也若し夫れ我身は失せ生ハ永く絶ゆるとも其は苦しからず唯さなりぬれば衆生利益の徳の永く開けなんことの心憂ければ聲聞にも緣覺おもならじ唯佛にならんと思はんは目出たき心なるへし是れ則ち大乘心なり方お知りぬ淨土菩提お至りなは身も樂しき世にも有らんすれば其お至らんと願ふは全く淨土菩提を願ふおは非ず只是れ生死輪廻を願ふ也生れて何にか

(往生本意)

せん生する物は必らず滅す樂しくて何おかせん有爲の樂は必らず尽る期あり淨土の樂は此世の樂に異なるか故お菩提の果は生れて至る所お非ざるが故おされは只衆生濟度の爲お二乘おはならじ佛おならんと思ふへき事にこそ候なれば此心は則ち淨土お生るへき因也衆生濟度する間おは身を失ひ命をはるばす事いくはくそ衆生の爲おは設ひ身智永くはるぶとも厭はじ左なりても利益だにもあらば痛みとするお足らす然れどもさなりなは衆生利益の事かなふまじければこそ佛おなり度候へければ是を以て明かに知ぬ菩提心なくては淨土に生せずと云ふことを但これに付て尋ねて曰く衆生の淨土を願ふは樂しからん爲にてこそあれ今聞く様ならば淨土お生れて何かせん只穢土に生れて有りなん衆生濟度は穢

(往生經之)



(答釋)

土こそ猶は勝れたるが故也此難を答て曰く誰か云ふ淨土を欣ふこと欲樂を本とすと欲樂の爲に生れんと思はんものは生るゝことあるへからず選て穢土に生れて生死に輪廻すへし欲樂は穢土の法なるか故也淨土の樂は愛欲の樂に非ざるが故也是に依て淨土に生るゝことは二の願に依るへし一は見佛聞法の爲ふ淨土に生れんと思ふ穢土には見佛聞法かたきが故に其見佛聞法は則ち利益衆生の爲也二は衆生利益の爲ふ淨土に生れんと願ふ淨土に往生し見佛聞法し直に還り來て穢土に生れ衆生を利益せんか爲ふ往生を願ふ也淨土は苦を受る衆生なくして大悲の所度かけぬるか故に此穢土の衆生利益は則ち大菩提の爲也此の如く願ふは淨土に生るゝ業因となる前にも申せし如く業は秤の如く重き者先

往生業因

(往生二願)

(往生疑難之二)

つ引くか故に決定し淨土に往生せんとする人は行住坐臥ねてもさめても一佛の名号を稱し又淨土の相を觀じ餘は何事も雜へす一切の善事功德戒定慧も皆往生の爲に廻向し深く穢土を厭ひ淨土を欣求し一向に佛願を仰きて長時不退を唯念佛三昧なるを淨業と云ふかく決定して信願行の具足したる人は必ず淨土に往生する也○又問ふ穢土の衆生濟度は大慈大悲が菩提心ならは何ぞ淨土に往生してひまのびんよりも直に穢土に生れて利益するを勝るへし答ふ假令戒定慧ありても屢々生死する中に隔生即忘し富貴に生れて徳を失ひ惡縁に依て三塗にも墮するは厭はせども己れ迷苦の中に落ちなは何ぞ他を利益せん淨土に不退の佛界なり一度往生を遂る人は濟度の爲に幾度穢土に生れても臨終には必ず

(答釋)



淨土をかへるが故に輪廻せず故に菩薩も淨土を願ふて  
往生を況や凡夫をやかく言へばとて全く依怙するに非  
そ心散乱すれ何の行も成就せざる故なり但し菩提心  
も無量無邊の階級あれども其大旨唯慈悲正直なり我宗  
の祖師だち慈恩大師撰陽大師等他宗の天台大師等無  
無邊の菩薩だち淨土をましませは我等も常々淨土を願  
ひ候何とて往生の御心掛專一に御決定なさるへく候五  
性各別の次は私の所存申上候也僻事にても候らんをろ  
く申候○尋て曰く五性各別の義も付て我身も定性無  
性にてもやあらんさらば淨土菩提を願ても由なしいか  
なりとも叶ふまじき事なれば是の如く身を疑はし菩提  
心を起す人ある可らす如何して我身は一定佛に成るへ  
き衆生もて有ると云ふことを知るへきや答て曰く須く

無性疑難

答釋

五性の權實を定へし豈濟度の方便を論せんや五性もし  
眞實ならば密意の便方を廻して衆生の發心を勸むへし  
其れ何の痛みかあらんや寧ろ愚者の疑網を恐れて法門  
の實理を談せざらんや何に況や形の如く誰識の教を習  
ひ又悟らんと思ふ願をも發さん程の人は定て佛の種子  
を具せる衆生也其故は深密經に定性無性は此教機も非  
そと嫌へるが故也誰の有智の人か金言を信せずして徒  
らに生死を輪廻せんや又法華經をもよみ若しくは其心  
をさとりん程の人ハ佛の種なからんや法華と唯識とは  
又是れ一昧なり其様も略をへし種子の有様大旨此の如  
し○此外業種子名言種子と申す事候名言種子と申候は  
上に申候つる種子なり善の種子は善の現行を生し惡の  
種子は惡の現行を生し無記の種子ハ無記の現行を生とる

法華唯識  
一昧

業種子名  
首種子



總報別報

を申候業。種子と申候の惡心を起せば惡の種子を薫し其種子の力に依て三惡道に生る善心を發せし善の種子を薫し其種子の力に依て人中天上に生るるを申候也。されは是も前の種子に離れたる事の候はそ〇されども其種子より起る果報の様は少し替りたる也。三惡趣人中天上の跡は阿頼耶識也。阿頼耶識は其性無記也。之を總報と名く此外別報と云ことあり其も無記なり。此故に善業の種子の力にて無記の果を起し惡業の種子の力にて又無記の果を起し候也。委くは事長く候。〇其に取て佛の種子ある人の修行して佛になる時心の發り悟の開て迷ひ候はぬ様は先に佛成へき種子も只一にては候はそ其種子さまざまに相分れたり。統つ八識の種子あり諸の心所の種子あり心所は廿三あり煩惱の六と隨煩惱の廿と

○無漏八識心所

●四智分別

不定の中み睡眠惡作と此廿八は無し此等ハ皆有漏ハ限る法なるか故也。○此か中に出障圓明の覺位には三身の功德前圓滿し四智の妙用成就するなり五識をば成所作智と名く意識をば妙觀察智と名く末那識をば平等性智と名く阿頼耶識をば大圓鏡智と名く其故は無漏の眼識乃至身識の五は皆神通變化の所作をなそこと勝れたり此故に成所作智と名く無漏の意識は妙に機根を觀察して說法斷疑の用勝れたり此故に妙觀察智と名く無漏の末那識は永く我執を離れて平等の法性を緣とるか故に平等性智と名く無漏の第八識ハ永く阿頼耶の名を離れて一切の諸法を浮かへること大ハ明なる鏡の一切の物の形を寫と加し故に大圓鏡智と名く。○抑も識と云ふは心王の名なり智と云ふハ心所の中の慧の心所なり有漏も識智みな有れども有漏の位は

○識智強劣

大圓鏡智

平等性智

妙觀察智

成所作智



○三品無漏

下品  
(見道)

中品

(修道)

○三品四智  
(配當)

識こわき故に殊に八識と名く智も殊み心所なきに非そ  
 無漏の位みは智強きか故に殊に四智と名く識も殊み心  
 所なきに非そ無漏の八識みは皆一々み慧の心所あるか  
 故也此外諸の眼耳鼻舌身色聲香味觸なんどの種子皆あり  
 其性皆善也此諸の無漏の種子も阿頼耶識み離れすと云  
 とも而も阿頼耶識の知る所み非そ○其み取りて無漏み  
 は三品の無漏と云ふ事候三品と申そ下品中品上品な  
 り下品と申そは見道なり見道と申そは初て無漏の智の  
 起て危障を斷する時也中品と申すは修道也修道と申そ  
 ら無漏の智の重て猶は起て細なる障を斷する時也上品  
 と申そは佛也諸障皆斷尽して悟のきはまる位也此三を  
 三品の無漏と申そ也上み申候つる諸の無漏の種子を此  
 三品み分ちあて候様は下品の種子みは妙觀察智平等性

智の種子のみなり相應の心王心所及ひ所變の色法の種  
 子皆是か中みあり其外は無し中品の種子も又此の如し  
 下品の妙觀平等の二智みは各各皆三十一の法あり妙觀  
 察智には二十一の外に尋の心所と伺の心所あり故に總  
 して二十三なり上品の種子には四智の種子みな有り心  
 所は何れにも皆二十一なり佛には尋伺なき故也五根  
 五境の種子も皆あり如來の三十二相八十隨好無數の大  
 光明無邊の淨土等も皆悉く此中にあり無漏の色聲香味  
 觸離れざるが故也されは金容紺頂の姿丹葉青蓮の粧ひ  
 花臺玉樓の搆へ八功七重の莊り併ながら我心の内にあ  
 り何に況や法性清淨にして無數量の微妙の功德本來具  
 足せるをや我身即佛也此處即淨土也と觀せんも全く相  
 違なき也然れども我身ながら我心をつかうと能はず無



明の迷は闇の如くに暗く薩伽耶見の執は石の如くに堅  
ければ觀すと雖も仍たしかならず譬へは深き闇の風は  
げしきに幽なる燈を以て行くか如し本より貪瞋痴の三  
毒は胸に迫る大病人の目も定かならず歩行を惱めるを  
りしも須臾にして燈滅し黒暗の長夜なれば諸の恐ろし  
き邪魔惡鬼四方に満ちて苦める誰一人救ふ者もなく是  
まで修し得たる大我漫大貪欲の業方も出せはいよ  
沈み落ち永劫にもいつかは明けん朝もなし誠に悲き身  
の果てかな此日頃邪見強きか故に智者も教へる手たて  
なく善人も不信を陳みて遠かりぬれば己れか心にか  
ふ邪人と親み他の信善までも誹謗し一家及び有縁の信  
心をも碎き共お深き暗穴お落し入るゝの罪いつれお  
報ふへき今世はしばしの間榮花お過るとも成れる末こ

(旃檀喻)

を痛ましけれ何に況や心ある善き人も眼を佛教お隔て  
生を邊鄙に受る輩をや何お況や地獄餓鬼畜生をや此  
故お無上大覺の種子徒らに沈み埋もれて現行を生ずる  
こと能はそ旃檀の種の土の中おありてさまゝの臭く  
穢らはしき物お埋もれて未だ生出さらんか如し然るを  
根熟し時至れる人は衆生の爲に佛にならん菩提の爲お  
衆生を利せんと云ふ心つよく起て寢ても覺ても忘るゝ  
時なく念々相續し生々世々生死をるとも惡縁お逢ふて  
も大慈悲心更に一點も動くことなければ我と教を開き  
若人の説くをも聞て彼三品の無漏の種子漸く潤て彼の  
旃檀の種の生ひ出つへき時やゝ近付て雨露の潤を蒙む  
るか如し是の如くして其心深く堅く成行けは教を學し  
行を修し功徳を積むに隨て智慧の位次第に進み慈悲の



德漸々お重て一大無數劫を經ぬれば凡夫の分齊の悟り  
愛お極りぬ無漏の種子悉く潤る中お下品の無漏已お生  
しなんとす而て未た生せそ初て堅固の菩提心を起せし  
より以來此位お至るまでを地前の菩薩と名く未た十地  
お入らさる故也○此一大無數劫か間覺の深く成り行く  
重々を申候お三十心と云ふ事候謂ゆる十住、十行、十廻向  
也此中の第十の廻向の終り法界無量廻向の位に加行の  
位を開く之を四善根とも名く 善根、頂善根、忍善根、世第  
一根、是也此四の位をは明得定、明増定、印順定、無間定と名  
く是より外の三十心をは皆資糧の位と名く佛道の糧を  
たくわふるか故お資糧と名く其終りには殊お見道の方  
便なるか故に加行と名く此資糧と加行との三十心の間  
の久き修行を一阿僧祇劫と申す也

○地前三十

○加行

(四善根)

(四定)

○資糧

德漸々お重て一大無數劫を經ぬれば凡夫の分齊の悟り  
愛お極りぬ無漏の種子悉く潤る中お下品の無漏已お生  
しなんとす而て未た生せそ初て堅固の菩提心を起せし  
より以來此位お至るまでを地前の菩薩と名く未た十地  
お入らさる故也○此一大無數劫か間覺の深く成り行く  
重々を申候お三十心と云ふ事候謂ゆる十住、十行、十廻向  
也此中の第十の廻向の終り法界無量廻向の位に加行の  
位を開く之を四善根とも名く 善根、頂善根、忍善根、世第  
一根、是也此四の位をは明得定、明増定、印順定、無間定と名  
く是より外の三十心をは皆資糧の位と名く佛道の糧を  
たくわふるか故お資糧と名く其終りには殊お見道の方  
便なるか故に加行と名く此資糧と加行との三十心の間  
の久き修行を一阿僧祇劫と申す也

●五位

(補)此宗の意は菩薩乘の修行の階級お五つの位を分つ  
謂ゆる資糧、加行、見道、修道、因位也究竟道是れ佛果位也是なり地  
前資糧加行の二位おして數々唯識止觀を修習せし力  
に依て見道の位お登り分別の煩惱所知の二障を斷尽  
して六七二識の生法二空の無漏現起して妙觀平等の  
二智と相應し修道十地の間に俱生の二障を伏斷し終  
に金剛無間道おして一念お佛果の障を斷して出障圓  
明の二轉の妙果お至る因因果滿の道理然らしむる故  
に因位の間四弘誓願を先とし十波羅密等の福智の萬  
行自利々他の巨益を勵まそ也

●二障

煩惱障  
所知障

今此地前に諸の障を多く伏そ障と申すは煩惱障と所知  
障と也煩惱の様は先お申候又隨煩惱をも是に攝む所知  
障法執と云ふと申そは彼の煩惱の一々の底に昧に迷へる心也



(杭人喻)

煩惱よりは断し難き障也と云へとも煩惱の外別の昧  
 ある非も只煩惱の底の幽み深き分を所知障とは申候  
 也譬へは夜る杭を見て人と思ふとき杭なることを知ら  
 ぬ心と人かと思ふ心と二重なれとも人と思ふ心の外  
 杭と知らぬ心なし只用に迷ふと昧み迷ふとの二重なり  
 煩惱所知の二障も又是の如く煩惱は人と思ふか如し所  
 知は杭と知らざるか如し貪にも此二重あり瞋にも此二  
 重あり乃至二十の随惑にも一々皆是の如し此煩惱も  
 麤き類あり細かなる類あり麤をば分別煩惱と名く其底  
 の所知障をば分別の所知障と名く今此分別の二障をば  
 見道に断と細かなるをば俱生の煩惱と名く其底の所知  
 障をば俱生の所知障と名く此俱生の二障をば修道に断  
 と○断と申とは無漏の悟開くる時煩惱所知の種子の永

(伏断差別)

(俱生二障)

(分別二障)

(分別俱生)

○劫

くはろひ失るを申候也伏と申候は未だ其種子を失ふに  
 は及はと種子は猶あれとも智慧の力に依て現行の起ら  
 ざるを申と也今地前の菩薩諸の障を伏と云ふは分別  
 の二障をば資糧の位に漸く伏しはしめて加行の位に伏  
 しをばり又俱生の二障をば加行の位も伏しはしめて地  
 前に未だ伏しはてと地上に伏しはつる也地前と申とは  
 前の三十心加行までを云ふ地上と申とは初地以上也其  
 機次に申候へし○されは地前の一大證証劫が間は障を  
 伏して未だ断せざる也證証劫と申とは無數劫なり無數  
 劫と申とは譬へは廣さも高さも八百里おはかり候は  
 んつる程の石を天の次の極て薄く輕きみて稀れおなで  
 くし候はんもるお其石の次第おつひ失せて物もなく  
 ならんまでの久しさを一大無數劫とは申候也地前の久



○見道

さは是にて候○かくしつゝ凡夫の分齊の極りぬれば無漏の種子遂お初て下品の現行を生そ則ち是れ下品の妙觀平等の二智也此時より初て眞如の理を悟り能く分別の二障を斷そ是を見道と名く是又重々あり一心眞見道三心相見道十六心見道次第くゝに續て起る是れ十地の中の初地の始也此眞と相との見道を通達位と名く眞如に牀通會達そる故也初地の入心の所也是より後を聖者と名け地上の菩薩と名く○十地とは歡喜地、離垢地、發光地、焰慧地、極難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地、なり初地と云ふは初の歡喜地なり今此十地と申そも悟の開けて漸々お佛に近づく心の位の重々を十お分たる也一々の位の中お多俱胝百千大劫を歷ると候へは初歡喜地と云はるゝ間もゆゝしく久く候見道は三重なれ

(遷達位)

○十地

○修道

とも時分短きか故お見道を出て修道に入ても猶ほ初地の内也○修道お入ると申そは妙觀平等の二智重て起る也是れ則ち中品の無漏の種子より生し候也其悟うたゝ明かおして前に申候つる俱生の惑を斷し初る也惑と申そは障を申候也此俱生の惑お取て煩惱所知ある中に菩薩は俱生の煩惱をは第十地の終りお佛おなるとき斷そ其より先き修道に入てより以來は漸々に俱生の所知障を斷し候也されは見道より出て猶ほ初地おてある間も初地の障の俱生の所知を斷そ初地より第二地に至り第二地より第三地に至り乃至第九地より第十地に至るおも次の地に入る毎お次の地の障となる俱生の所知障を次第に一々お斷そる也かくしつゝ第十地より佛おなる時の佛果の障となるものを斷そ○佛果之障と云ふは斷

○佛果之障



菩薩不斷  
俱生煩惱  
之由理

(十波羅密  
十重障十  
如真)

○三大僧祇

しのこせる俱生の所知障とわさと断せしめて置たる諸  
の俱生の煩惱となり此二の障よく佛果を障るか故に正  
く成佛する時之を断する也菩薩の俱生の煩惱をかさへ  
て十地の間に断せしめて置くことは一ふは十地の障に  
非ざるか故也一ふは衆生済度の爲なり此外ふも故候其  
様ども略し候十地ふは殊ふ勝たる事候各一の行を修し  
て一の障を断して一の真如を證す所修の行をは十波羅  
密と名く所断の障をは十重障と名く所證の真如をは十  
真如と名く其様も畧し候○さて初地より第七地の終に  
至るまで又一大僧祇劫を経る是れ第二僧祇なり第八地  
より第十地の終に至るまで又一大僧祇劫を歴る是れ第  
三僧祇なり地前の一大僧祇は是れ初僧祇なり之を三僧  
祇劫の修行と名く

三祇攝在  
一刹那

○無漏種子

(補)三大祇の修行の劫石芥城長遠なれども攝在一刹那と  
て一念に攝在とされはとて覺の前には一念實事とし  
て三祇假説も非も又三祇實事にして一念假説なる  
も非も譬へは彼の列子が夢中の三生の覺の前の刹  
那なるか如し今三祇一念も亦た爾り三祇を一念に攝  
在とせども一念また短時ならも一切の法は如幻虚假  
にして定相あることなきか故に日夜の劫數不思議お  
して彼此互ひふ相攝も故に迷の前には三祇一念共に  
假説おして覺の前ふは一念三祇共ふ實事なり  
其間の無漏の智も刹那々に生滅を滅する毎ふ種子を  
煮と煮とる様は有漏の種子の如し無漏心の種子を煮と  
ることは見道の第二念より煮し始む第二念と申とは第  
二刹那なり無始より以來凡夫にてありつる程は無漏の



新古合生  
三祇漏無  
倍増  
三祇功徳

新煮種子なし無漏心起らされは誰か是を煮せん故に見道の最初の刹那の智は偏へに法爾無漏の種子より生も其後新煮種子出き剛て本有種子新煮種子寄り合て生も之を新古合生と名く新古合生は無漏のみ非も無始より以來有漏の諸法も亦た是の如し何れの法も本有新煮の二類の種子俱に有ふは必らも新古合生し候也此三大僧祇に取て初僧祇は有漏の覺りのみ起りて未た無漏の覺開けも第二僧祇には有漏無漏雜りて起る第三僧祇には偏に無漏の覺のみつゝきて有漏の智雜はるとなし功德念々に早く積りて覺り刹那々に速に開く也初刹那は前の二僧祇に一倍し第二刹那是初刹那も一倍も一倍と申そは本より有つる程の猶は加はり添ふを申候也是の如く第三刹那第四刹那乃至第十地の終の刹那まで

○相好百劫修行

色究竟

(金剛喻定)

受職灌頂

○究竟道

次第くお倍々す○第三僧祇の修の上お相好の百劫と云ふ事候謂ゆる佛お成らんとする期近付て殊も百劫か間諸相好の業を修とる也是の如き諸の修行満足とると色究竟天とて物の形のある分齊に取ては上のはてお候所よりは猶は上の大自在宮と申候淨土おて十阿僧祇百千三千大千世界おはいかる程なる大寶蓮華王の座の上お坐して金剛喻三摩地と申も定に入て前に申候つる佛果の障を斷とる也此時を等覺の菩薩と名く受職灌頂の儀式この位おあり○此の如くしつゝ佛果の障早く斷じ畢りぬれば速に究竟道お入る此時一切の有漏劣の無漏は皆はるひ失せぬ是は謂ゆる彼の無始より具する所の上品の法爾無漏の種子より四智悉く現行し萬徳圓滿する也是を佛と名く○凡そ因位も果位も心も色も無



○無漏唯善

深の法は其性皆善也。有漏の三性雜はるゝは同しからず。既ち成佛しぬれば其身法界に滿ちぬ諸根相好一々に無邊也。三大僧祇の中ち修習する所の無邊の善根お酬たるが故に因果の理必然として因無邊なれば果無邊也。○此より後は新く種子を薰する事なし。只無始よりの上品の法爾無漏の種子及び下品中品の無漏の種子の本有も新薰も皆轉して上品おなれるのみ無垢識の中ちあり。○無垢識と申そは。大圓鏡智相應の心王なり。則ち凡夫より第七地までは之を阿頼耶識と名く。藏識の名は狭く第八地より等覺までは之を異熟識と名く。異熟識の名は廣く佛お成りぬれば無垢識と名く。妙覺の佛位に至りぬれば無垢識をば梵おは阿末羅識と名く。是れ則ち八識の中の第八識也。凡そ第八識おの様な名とも候。阿陀那識も此識の名なり。此故

○佛果無薰

○八識三名

佛果心王

○阿陀那識

佛果心所

○賴耶三藏

能藏一

所藏二

執藏三

○異熟三義

因異熟一

異時果熟二

因善惡果無記三

に佛お成て後も八識あり心所の各二十一也。前お申候ぬ。○補阿末羅識は謂ゆる第九識おして。如來藏これなり。阿頼耶識お三義あり。一には能く種子を持つか故に能藏と云ふ。二には能く薰を受るが故お所藏と云ふ。三お第七識念々お執して我となとか故お執藏と云ふ。八地お登りて永く伏それば彼の薰を受けそ七識も我と執せず。故お八地の前に總に藏の義を捨る也。異熟識にも亦た三義を具そ一に因種變異して果まさお熟そ二に因滅して果生を定て異時なるか故お三に因は善惡に通して果は無記なるか故お無垢識の佛果を證せしより未來際を盡すまで智と同時に發して相續し無漏の種を持つか故なり。唯識論お云く。大圓鏡智相應の心品おして性相清淨もろくの雜染を離る純淨圓徳の現



種の維持おして身と土と智との影を能く現し能く生  
とること大圓鏡の衆の色相を現するが如しと

○頼耶真如  
不同

種子緣起  
真如緣起

(不一不異)

(補)大唐の貞觀以前の古師は多く阿頼耶識を真如と翻  
して真如受薫の義を存せれども玄奘三藏能く真如と  
阿頼耶識との不同を分てり故に此宗の意ハ種子の緣  
起を立て真如緣起の義を許さそ然れども真如と阿頼  
耶識と相望して一向お異とも言はそ一向に一とも言  
はそ事理不一不異と談して不一門おハ生滅常住真俗  
二境有相無相の差別を分ち不異門おハ事を本ととる  
故おハ五法事理を上に云へる識自相、相應識、所唯識と名け  
理を本ととる故おハ萬差の諸法を真如と稱そ今此不  
一不異の二門とこしなへに並へて之を談し一門に偏  
よらざるを以て法相の宗要ととる也

○佛果四分

今此心王心所一々に皆四分あり其相分の中に五根五境  
あり五境の中に如來の相好莊嚴大光明等あり不可説不  
可説の淨土あり是等の法の中に實法としてある法は皆  
一々に種子あり其種子は併なから如來の無垢識の中お  
藏め持てり生ずる時は其一々の種子より生そ既に生る  
か故に又必らそ滅そ種子も刹那くお生滅し現行も刹  
那くお生滅そ是れ則ち衆緣の爲お作りなされたるか  
故なり既に衆緣の作そ所なれば佛身なれども之を有爲  
と名く有爲と名くと雖も二種の生死を離れたり○二種  
の生死と云ふは分段生死變易生死なり分段生死と云ふ  
は我等がうくる生死なり長きも短きも其命必らす限お  
りて久しからんと思へども叶はざる果報なり變易生死  
とは菩薩の受る生死なり久しからんと思へはいくらも

(佛身有爲)

○二種生死

分段

變易



久し命に定れる限なし但佛も成るときのみ其身をそつ  
佛の長く二の生死を離れたまへり生も生死の生に非そ  
生死の生に業力も依て三界も生する義なり佛身の生に  
有爲の無漏の起るを生と名く三界も生する義に非さ  
る故なり滅も生死の死に非そ生死の死は業力盡きて命  
終る義なり佛身の滅に有爲の無漏の刹那に滅せるなり  
佛の命の盡る時なく無量壽なるが故なり只是れ法跡微  
細の刹那生滅也かゝる故も出離生死の佛身と名く若し  
生はあれども滅なしと言はし此ことわりあることなし  
之を有爲の報佛と名く○今此周遍法界の相好莊嚴の有  
爲の報佛を自受用身と名く既に是れ衆生の爲になりた  
まへる佛なれば衆生を利すること暫らくも止む時なし  
此故も凡夫二乘地前の菩薩十地菩薩等覺まで之を濟度

佛身生滅

佛身無量

出離生死

自受用身

しましませ也○而るに周遍法界の實の御姿は等覺の菩  
薩も猶は見ること能はそ何況やそれお及はさる菩薩  
二乘をや何況や我等か類をや故に人お見ぬんとてさま  
くの姿を顯はしましませ其中も我等か爲に顯はれま  
しましませ丈六の佛なり一四天下を國土とて資糧位の菩  
薩聲聞緣覺までも同く見たてまつる佛也之を小の化身  
と名く加行位の菩薩の爲に顯はれましませ御姿は御長  
いくらとも申たる事はみへねとも三千大千世界を國土  
とすと候へはことの外も大に顯はれましませと候  
はめ之を大の化身と名く○初地の菩薩の爲も一葉の  
廣さ三千大千世界おはしかる程の蓮華の百葉なるを座  
ととし其座お叶ふ程なる佛おて顯れましませ第二地の  
爲もは千葉の蓮華を座とて第三地の爲には万葉の蓮華

變化身

他受用身



を座とす乃至第十地の爲ふは不可説不可説の蓮華を座

とす各々其座に相かなふ程の御姿なれハ次第まさり

まそらん事さこそ候はめ此十重の佛身を他受用身と名

く其國土は皆淨土なり其淨土の廣さは華座の如く次第

お廣くなれり去れば初地より第十地に至るまで十重の

淨土あり極樂は則ち阿彌陀佛の初地の菩薩の爲ふ顯れ

ましまし時の國土と見ゆ候○是の如きの諸法は能く眞

如お冥合せり此眞如法界を法身を名く今此法身自性身は

に居報身唯佛與佛の境界にして等覺の菩薩すら尙は之を知らず他受用

身を現して他受用の土に居するなり化身佛身にして淨穢二土に居する所也

を佛の三身とは申也

(補)今此他受用の淨土法相宗の意は或は淨居天上或は

四方處々不定なりと云ふなり是れ則ち唯識の觀解成

(十重佛身)

(十重淨土)

(極樂)

○法身

○淨土處々不定

就そるとき如幻の悟の前には境界として心お隨かは  
すと云ふことなきか故お一心清淨なれば其處即ち淨  
土おして必らすしも此お去り彼に往くお非す只座を  
動かさすして其處に淨土を變する故お其方域を定む  
ることなしと云ふ

化身をは應身とも名く他受用身をは報身お収む淨土の  
中に至り極れる淨土は自受用の淨土なり猶ほ其性を申  
さは法身の土なり法身とは毘盧舍那なり報身は淨土の  
彌陀なり又盧舍那とは釋尊の華嚴等の最上の法を説き  
たまふ時を云ふ諸經を説きたまふは應化身の釋迦佛な  
り三身三佛及諸佛即一心法界一切唯識なり

(補)是の如く三身具足四智圓明の果徳お至りぬるとき  
は涅槃にも住せず生死にも留まらそ或ハ恒に佛身を

○三身三佛



現し或は隨類應同の非佛の形を示して濟度利生する  
を此宗の極則とし唯識修行の觀門究竟の所得の果と  
する也

五位の修行の様をろくかやうも候也抑も三大僧祇の  
修行の久きはあぢきなく候へども大覺の前は之を一  
刹那も扱ひ三大阿僧祇定て久しと思ふは是れ無明長夜  
の未たあけさる程も堅執の夢さめさる間也此迷一度さ  
めぬれば三祇即一念也一念即三祇也なごかは修せさら  
ん又なごかは至らざらん此事ども誤まりもや候らん愚  
かなる文も候へども數度御心も入れて讀みたまひ又文  
を離れて能く心も觀したまふべし唯識は殊も觀心が  
大切にて學解ありども觀心深からされは唯識も非と是等  
同も不敬も拙く候へども御見取り安きを存し候此度大

思悲母の重き仰み隨て形の如く記し申上奉り候續は細  
々は來月中旬恩願を拜し候節に申上るまゝ經論の文も  
宗家の釋なども皆覽して候也

沙門行慧



校補 唯識大意 一名法相 二卷抄 下卷 終

(古寫本奥書)

觀佛三昧經に佛の御父淨飯大王出離の要法を尋ねたまひしに佛萬行の中に念佛を勧めたまふ父王曰く神通妙用第一義諦何を我に教へざるや佛曰く是は凡夫の及ぶ所に非ぞと寶積經には御父の大王及び七萬の釋氏の御一門皆念佛を勧めて往生を遂げさせたまふ以來親在せば教へ導き死すれば回向を諸師皆然り根來の覺鑿尊者は密宗の大導師なれども母堂の爲に孝養集三卷を撰ひて念佛を勧め吾か大恩の導師良遍阿闍梨も御老母の爲に唯識の大意を述べたまふ此書は大乘法相宗入門の階梯唯識觀行後進の所依也誰か亦た信教せざるへけんや爰に於て頂戴して拜寫し奉る

仁治三年壬寅三月二十四日



弟子隨從沙彌緣圓記

弘安六年癸未八月七日

順松房緣憲拜寫

元亨二年壬戌二月十六日より

良春房順專拜寫

文和元年壬辰九月十二日拜寫

緣春房經實

弘和二年壬戌正月六日

傑堂能勝二十八歲拜寫

文化三年丙寅六月二十三、四兩日駿河臺の假宅に於て十五歲橋原主水正命謹て拜寫し奉る者也

○良遍阿闍梨傳 本朝高僧傳卷第六十所載

釋良遍 諱行 號信願 不詳其本貫 從興福寺覺遍得法 相宗遊諸寺 進慧解 瑜伽唯識 羅匱襟懷 尤長 因明聲喧 兩京居興福寺勝願院 爲時師表 勅任法印 權大僧都 性守隱約 撝謙世榮 貞永初 四十八歲 就覺盛律師 愛其足戒 與盛年相若 而不耻下問 通別相狀 驗其關鍵 間有疑滯 決之定舜 覺盛立通受比丘性戒 俱成之義 學者疑信 相半 是非旁午 遍初機 衆決然 反思引證 古今著書 救之毀辱 頓息盛義 始行四衆 跋然渴思 出化遷往 白毫寺 生駒大聖竹林寺 盛唱相宗 丕啓購肆 自他宗傑抱帙雲委 修安養之法 常以勸人 曾凝白毫觀心 眼開明彌陀具相 現前因著數章 讚稱淨土 嘗謁聖一國師于東福 咨詢禪要 寬元四年春 論本宗極致 著真心要訣 副呈書翰 需國師之跋語 其畧曰 依他離言 眞如離言 其義有與不與 其有異者



事是相故有假似相理非相故都無其相所以名言有願不願其有不異者假似生滅全不違於不生滅不生滅法全不違於假似生滅生滅假似故真不生滅不生滅故生滅假似如是假似法豈有定相豈無其相如是無生法豈有實性豈無其性今此假似今此無生互相攝取都無隔事中有理々中有事由此義故事々無礙理々無礙事理無礙如此三門更互相望亦復無碍謂事望理不即之中事々無礙不離之中事々無礙以理望事亦復如是是事望理不即之中事理無礙不離之中事理無礙以理望理亦復如是今此一切不即門中建立性相決判諸法然此不即亦不即離如幻事故因果性故今此一切不離門中萬理無隔融通自在然此不離亦不即離非一定故存性相故然於此中事々相望不即不離爲本理々相望不即不離不離爲本事理相望不即不離二門均等故諸性相都不離

亂當知一念一刹那中定與不定俱句俱非皆具足也所執四句一切皆遮非執四句一切皆存含無拘故當知諸法一切性相一切無礙如是一切性相決判令知法之不思議我宗意也如是知己即絕思議可修此法何學此法却增思議一期執慕四生無止哀哉當之如何夫無毘尼則罪惡雲起闕禪那則見慢岳峙無上妙藥爲之失驗法已迫於像末於是不勵夫期何時身既列于佛子於是不修更望何日豈待後佛之濟度忘現前慇懃之教耶豈願未生之淨土棄已得值遇之法耶嘗聞禪師學綜內外解涉大小在宋六年得徑山長老之法爲臨濟和尚之孫大機大悟有無礙辯但願吾宗有言無實可耻可悲謹作愚鈔以呈座下願以此緣期來世耳國師答書曰竊觀鈔記依詮三性之說不墮凡情廢詮一實之旨不讓聖位佛語佛心不即不離雙修雙行頓斷塵緣漸除習氣至乎無作之作證無



功之功夢幻之劫數覺悟則須臾此則宗說兼通詮旨周備爲  
後昆之格式同先賢之述宣誠謂南山霧密非虎豹難以居東  
海浪深以蚌蛤可更酌明教曰後世學佛者不能盡考經論而  
校正之東教者不知佛微旨妙乎言外語禪者不知佛所詮概  
見乎教內雖一圓頓方服之屬而紛然自相是非如是者古今  
何嘗稍息爾學稼之愚難知聖賢之趣刻舟之見莫酬魚魯  
之分航海梯水求知識於異朝斜通傍度訪道風於他域粗忘  
世上之是非猶如久遺之履願棄人間之寒暑恰似已朽之材  
又恐學業道殊各隨所習自相是非靜論豈異矢人函人之術  
乎嗟呼參禪問道之輩不揆管見美其大猷聊述愚悞更以加  
平日耳遍以建長四年某日化於竹林寺春秋六十有九臘夏  
二十有一所其著通受文理鈔止防用心別受行否通受懺悔  
法蕊蕪畧要義表無表章鈔念佛往生決心記法相大意鈔凡

若干卷矣

贊曰通公內宗法相博瞻優學以禦務之偉器扶大悲之化門  
如強柱支大厦八風吹而卓爾也余檢戒壇院書庫獲茲二書  
於蟬爛之底事義幽隱理譚精微固釋相宗圓融之願矣古人  
之覃於家學也如此後學勉焉耳



明治廿五年四月廿日出版印刷御届

京都市富小路通御池上ル守山町

松前屋書館

繙刻兼發行者

藤井富三郎

京都市三條通高倉東へ入

印刷者

出雲寺文次郎

京都市日本橋區横山町一丁目

大賣捌

出雲寺商店

京都市麻布飯倉五丁目

大賣捌

森江佐七

京都市淺草北東仲町

大賣捌

淺倉屋久兵衛



